国語・ことば

■　語る会に向けての検討の経緯　■

第１回　５月２５日

幼児・児童・生徒の実態から見た教科内容に関する情報交換及び問題点等
教科で育てたい力，重点化したい内容，大切にしたい点，留意すべき点等

・名前が書けるか（幼）　・接続のメリットは何か　・幼では「読むこと」小低では「書くこと」
・幼の「ことば」「表現」「体験」　・小の文字，言葉や文字の獲得の習慣に苦痛はないのでは
・小６の俳句のみ発展，親しもう　・小で喜ぶ百人一首　興味のある次期には降ろしていく
・編入学の子どもを分けるのか，混ぜるのか　・小に降ろして繰り返しの内容が考えられるが，編入学生徒と関連して混ぜられるのか？２つのカリキュラムが必要。・小中の内容量の違い。暇な時間を作らないように。

第２回　６月２１日

○小中の教科書を持ち寄り，比較検討を行った。

第３回　８月２９日

小中一貫教育の視点　・異学年集団
○カリキュラムづくり　貫くテーマを　基礎基本の発展
○幼少の接続　“円滑に‥‥”・年中，年長の到達を踏まえて小学校への接続につなげる
○小中の接続　・ディベート　・古典

第４回　９月２６日

語る会の授業構想につい（連携に関わって）
（幼）生活体験からの言葉の獲得
　　生活や興味・関心に基づいた話の読み聞かせ
（小）幼稚園で触れた世界
　　触れなかった世界
　　<例>昔話のような一括完結ものをさらに広げる　読む楽しさへ
　　シリーズ物
（中）批判的な読みへ

第５回　１０月１１日

「語る会」教案審議　生徒同士での紹介の仕方などについて

第６回　１０月２４日

「語る会」教案審議　幼稚園から中学校までの「昔話」のふれかたなどについて

第７回　１１月8日

1「語る会」教案審議
2　記録の確認
3　リードの検討

第８回　１２月１５日

今後に向けて大切にしたいこと
５つの観点（間瀬先生）
・読書力　・自国語への意識を高める　・共同での話し合い等（コミュニケーション）
・メディアリテラシーを育てていく　・対話力
○問題点を明らかにする・・・・・様々な言語活動の発達を洗っていく
○能力系統表をつくっていく・・・モデルを・・・・
○切りに何をするのか？（視点をどこに？）絞っていく
○幼・小・中の授業をお互いに見る
○家庭にまで広げていきたい（読書など）

幼小中一貫教育に向けて　　（国語・ことば）

1　現状と課題

現在の附属学校園におけるくらしや学びの実態ならびに小中学校の国語科の学習の実態から，以下のことがあげられる。

(1) 幼稚園について

① 幼稚園教育要領の「言葉」では，「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し，相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て，言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。」とされている。ねらいとして「表現の楽しさを味わう」，「伝え会う喜びを味わう」，「絵本などに親しみ心を通わせる」とある。それとともに「自分の気持ちを表現」できたり「人の話を聞く」ことができたり，「日常生活に必要な言葉がわかる」というねらいもあげられている。つまり幼稚園での言葉の教育は日常の生活の中で言葉を使い，それに言葉による表現やコミュニケーションを楽しむことができるようにしていくものと考える。その中には，絵本や音楽をはじめとした教材によって想像力やイメージを広げる「劇的な表現の活動」も含まれている。

② 小中学校における教科としての国語教育につなげるために

上記のように幼稚園での言葉の教育は，系統性をもった言語の習得より，むしろ生活や遊びの中にある言葉を充実させ，豊かな体験に裏打ちされた，実感をともなった言語表現の基礎をつくっていく時期にあたると考えられる。これらの豊かな体験と言葉をいっそう豊かに確かに育てていくための視点として，次の点があげられる。

- 体験の中での言葉の習得や言葉の差異の意識化を行っていく。
- 言葉の体験を小学校と情報交換し，それを活用するとともに発展させていく。
- 絵本などを通していっそう想像の世界を広げ，豊かな言語空間の素地を醸成していく。

(2) 小中学校について

小中学校では，「話す・聞く」，「書く」，「読む」，「言語事項」の四項目の内容からなる系統的な学習が国語科において実施される。 また，学校の教育活動全般を通して言語活動が適切に行われるようにするとされている。 教科という特性のもと，系統的な言語習得を行っていくものであるが，そこには言うまでもなく豊かな体験があることがベースとなっている。

① 「幼稚園から」小学校の課題

- 幼稚園での豊かな体験をもとにした言葉を表出させていく。
- 体験に基づいた言葉を整理したり，区別したりして，いっそう自覚的に言語の運用ができるようにしていく。
- 読書を通して，いっそう豊かな言語空間を広げていく。
- 幼稚園での言語環境をもとにして，適切な言語生活を行っていく態度を育てる。

② 「小学校から」中学校の課題

・　小学校での学習に立脚していっそう言葉を整理したり，区別したり，鋭い言語感覚に裏打ちされた言語運用を展開していく。
・　小学校までの読書体験に立脚して，豊かな言語空間をいっそう広げるとともに生涯にわたる読書生活の基礎を築く。
・　小学校での言語生活に立脚して，いっそう適切な言語環境を整えといく態度を養う。

2　幼小中一貫教育に向けて大切にしたいこと

(1) 幼児期からの言語の習得に立脚した円滑な学習

一般的に言って，人が母国語を習得する際には，まず身の回りの具体物を言葉であらわすところから始まり，少しずつその範囲を広げていく。そして，ものごとの概念や感覚的な差異などの微妙なものを言葉にして区別し，表現したりできるようになるのである。こうしたことから考えると，人の思考やものの見方などの人間性にかかわる発達と言語の感覚は密接な関係にあると言える。幼児期，児童期，生徒期における言語習得の特性をしっかりとふまえていきたい。

・　幼児期は，具体的なものやことの言葉を獲得しつつ，表現していく時期にあたる。ここでは，身の回りの豊かな体験から紡ぎ出されるあらゆる言葉自体が学習であろう。実際の生活をベースにした実感をもった言葉の創出が行われる時期をまず大切にし，小中学校での国語の学習の基礎を養いたい。
・　小学校では，具体的な具体的なものやことの言葉に加えて，少しずつ抽象的な言葉が獲得されていく時期であり，双方のバランスをとりながら，言語の運用ができるように心がけたい。
・　中学校では，小学校と同様な言葉の獲得に加えて，抽象的な言葉による表現をいっそう洗練していくことを心がけたい。

(2) 幼小中カリキュラム構築

幼小中一貫して子どもを育成していくカリキュラムを作成していく上で，「基礎・基本の充実」と「豊かな言語感覚の育成」の二つの柱を立てていきたい。

○基礎・基本の充実

これは，国語を学習していく上での基礎的な力と考え，「読む・書く・話す・聞く」はもちろんのこと，さらに学習への取り組みの意欲を育てていくものである。これらは，幼小中と一貫して重きをおかれるべもので，習慣化をめざすべきものでもある。これをカリキュラム上に系統的に位置づけて，しっかりと育てていきたい。

○豊かな言語感覚の育成

これは，文学作品を教材にした学習や読書生活の充実といった面からカリキュラム上に系統や関連性をもたせ，子どもの言語感覚をいっそう磨いていきたいと考えている。

(3) 教育活動全般を通した言葉の教育

国語科の学習以外の全般的な教育活動における，言語環境を整備し，適切な言葉の運用ができるようにしていくことを幼小中全教職員が一貫して進めていくことが重要であり，そのために必要なことを積極的に提案していきたい。

小学２年１組　国語科学習指導案

指導者　　喜多川昭博

1　単元名　　みんなで声に出して読もう！昔話の世界

2　授業の構想

(1)

> 楽しかったこともあったけど，くやしかったことは，じぶんがめあてにした「大きな声で読む」ことがはずかしくてできなくて，教科書で顔をかくしてしまいました。こんどなんかのはっぴょう会があったときは，じぶんのめあてにむかってがんばりたいです。　A児

上の文章は，「お手紙」の単元を学習した際に「かえるくんやがまくんになりきって読もう」という共通のめあてを設定し，音読発表会を行った際のA児のふりかえりである。この児童は単元当初は音読をすることに対してそれほど意欲は感じられなかったが，学習が進み，音読カードなどで何度も何度も練習するうちに自分なりのめあてをもって進んで取り組むようになった。次の音読に向けての意欲もこめられており，自分のめあての達成に向けて懸命に取り組んだことが分かる。

本学級では，学年はじめの「ふきのとう」の学習，そしてこの「お手紙」の学習において，読み取ったことをもとに音読発表会をすることに取り組んできた。前者では動作化を中心に，後者では音読による表現を中心に学習を進めた。どの児童も真剣に取り組み，読み取ったことを自分なりの工夫で音読に表現してきた。そのような積み上げもあり，国語では新しい学習に入るたびに「音読しようよ」というリクエストがあがるほどである。しかし，子どもたちの様子を注視してみると，楽しそうに音読をしている反面，相手に聞こえない声で読んでいたり，元気よく声を出すのはよいが，音読による表現と場面の様子とがあまりにもかけ離れている児童もいたりする。上のA児のふりかえりにもあるように，児童は声に出して読むことの楽しさを知り，自己のめあてに向かって取り組むことへの意欲を十分にもっている。「お手紙」の学習で音読の楽しさにしっかりと浸ったこの子どもたちが異なるお話に出会ったときも，場面にあった表現を工夫しようとする思いをもとに，冒頭のA児のように自分なりのめあてをもち，いきいきと音読する姿を求めることはできないものであろうか。

(2) 以上のような子どもたちの姿をふまえて，今回は「昔話」について扱うことに活動を設定した。昔話を設定した意図については，以下の２点である。まず，昔話は登場人物の人柄も明確であり，そのストーリー展開の単純明快さから，低学年の子どもたちが楽しんで読む材料として，申し分のない条件を備えているといえる。次に，本学級の児童が日頃からの読書でこのような「昔話」を率先して読んでいるとはいえず，これを機に読書の幅を今以上に広げて欲しいという願いも挙げられる。

このような昔話の学習において，単元のはじめには共通の学習材として「かさこじぞう」を取り上げる。その意図は以下の２点である。まず，この作品を読み取っていく上で浮き彫りになる先祖たちの生活様式，ものの考え方，思いやりの優しい心など，本学級の子どもたちに出会ってほしい内容の物語であることが挙げられる。次に，このお話は，大年の市でじいさまが声を張り上げてかさを売る場面，じいさまとばあさまで楽しそうに餅をつくまねをする場面など，場面構成がとらえやすい上に様々な気持ちや場面の様子について理解がしやすい。このような教材を音読を中心に学習することを通して，寂しい気持ちや優しい気持ち，そして元気よく声を張り上げることなど，場面の様子や登場人物の気持ちに沿って，自分なりのめあてを考えながら音読する力が育っていくことが期待できるからである。

一貫教育上の視点についてであるが，子どもたちは幼い頃より読み聞かせや紙芝居などによって，多くの本やお話に「読んでもらうこと」で触れてきている。小学校に入学し，国語の学習が始まると文字を習得し，「自力で本を読める」ようになる。入門期の国語の学習では，音読のリズムを楽しんだり，文章から登場人物の気持ちや場面の様子を考えたりする活動を積み上げていく。このような幼い時期から小学校低学年にかけては「自分で読む」ことの基礎を作りあげる時期であると考えられる。

そのような基礎を作る今の時期に，音読によって場面の様子や登場人物の心情が相手によく分かるように表現することを一人ひとりに求めるのは難しい。よって，自分なりに読み取って理解したことをもとに音読のめあてを一人ひとりがもち，お話の好きなところを友だちに紹介するというスタンスで音読の場を保障することは，3 年生以降において場面の様子が聞き手にもよく分かるように音読をしていくことへと有効に働くであろう。

また，読書の世界を広げることによって，友だちどうしで本の内容について情報交換をしたり，感想を述べ合ったりするなど，本を媒介とした関係性を構築していくことも期待できる。相手を明確に設定した音読発表や好きな本を語り合う場づくりなどから，幼い時期から中学卒業まで読書を通した関係性を深める機会を設定することができる。今回の単元をそのひとつの場として設定し，友だちとの関わりの中で，さらに読書の幅を広げたり読書のおもしろさに触れたりすることもできるであろう。

(3) 本単元においては，前述のように「かさこじぞう」の場面の様子や登場人物の気持ちを考えた音読のしかたを考えることを起点として，他の昔話へと読み広げる。その中で各自がお気に入りの一冊を決め，その本の好きな場面について「なぜこの本のこの場面が好きで，どんなことをめあてにして読むか」という言葉と共に，クラスの友だちに音読発表する，というのが大まかな流れである。

まず，第 1 次は「かさこじぞう」に出会う場面である。本単元に入るまでに教室には昔話を一人一冊以上の冊数分用意しておき，いつでも手にとって読むことのできる環境を作っておく。このときに「かさこじぞう」のような「しあわせになるお話」，そのほかに「ふしぎなお話」，「こわいお話」，「ヒーローのお話」，「おもしろいお話」，「よくばりなお話」，「かなしいお話」というジャンルに分けておき，児童が自分の興味に応じて読み広げていくきっかけをつくっておく。第 1 時ではその本の中から「かさこじぞう」を取り出し，読み聞かせるとともに教師から「かさこじぞうしょうかいカード」を児童に提示する。このカードには，「好きな場面」，「その場面を選んだ理由」，「読むときのめあて」で構成されている。今回の単元では一人ひとりがこのカードをもとに，自分の選んだ昔話を音読する活動であることを告げ，お話との出会いの場で児童が今後の見通しをもてるような場にする。

第 2 次では「かさこじぞう」の 5 つの場面について，読み取ったことから自己の音読のめあてを設定して音読の仕方を考えながら学習を進めることで，第 3 次以降に自分の選んだ本でめあてを設定して音読をする活動につながるようにしたい。場面ごとに読み取った後は「どの場面が好きでどんなめあてをもって音読するのか」という点について，一人ひとりが「かさこじぞうしょうかいカード」を書き，それをもとにグループ内（学級の班）において音読し，次の活動につながるようにする。このときに，(2) で述べたように，自分なりに読み取って理解したことを音読することについて今回の学習では大切にしたいので，読み手が設定しためあてを聞き手と共有できるようにしたい。

第 3 次では，まず，前述のようなジャンル分けされた昔話の中から，友だちに音読して紹介したいお気に入りの一冊を決める。このときには授業時間をはじめ課外の時間にも児童がたっぷりと読書に取り組む時間を保障したい。その上で各自が「かさこじぞうしょうかいカード」に沿った形式の「○○（お話の題名）しょうかいカード」を作成し，自分の音読のめあても設定する。作った児童から自分の選んだ好きな場面について，同じジャンルを選んだ児童同士でペアを組んで，互いにめあてを共有しあいながら音読発表の事前練習を行う。

第 4 次では「お気に入りの一冊」の好きな場面を友だちに向けて音読して発表する。このときに発表を一人ひとりが全員の前ですることは難しいので，「お気に入りの一冊」について異なるジャンルを選んだ同士の児童でグループを組み，その中で発表する。ジャンルによって人数に差があれば，適宜調整したい。発表後は本単元の学習をふりかえり，今回の学習が今後につながる場にしたい。

本時は，第 4 次の第 1 時であり，発表の第 1 時となる。選んだジャンルの異なる児童で構成したグループ（6～7 名程度）に分かれて音読発表をする。発表後は互いに感想を言い合うが，「よい点」を言い合うことによって，これまでの取り組みを認め合いたい。終末には特に児童から見て取り組みのよかった発表を全体に広める場を設定する。この時に児童に任せきりではなく，教師も机間指導の際に特にめあてに沿って音読に真剣に取り組んでいた児童の様子を観察しておき，全体に紹介しておきたい児童もこの場で紹介できるようにしておく。このことから，次時において再度メンバーを替えて発表を行う際に，友だちのよさを取り入れて自分の発表が向上するきっかけになるようにしたい。

3　活動展開計画（全１５時間　本時１３／１５）

次	主な学習活動	時	具体的な学習活動
1	「かさこじぞう」に出会い，「むかし話しょうかいカード」をつくるという単元の見通しをもつ。	1	・様々なジャンルのお話から，「かさこじぞう」を選んで教師の作成した「かさこじぞうしょうかいカード」を交えて読み聞かせることで，単元の見通しをもつ。
2	「かさこじぞう」を気持ちや場面の様子を考えながら音読に取り組み，各自が好きな場面を決め，「かさこじぞうしょうかいカード」を書いてグループで読み合う。	2〜6	・１～５の場面について「登場人物になりきって読む」ことをめあてとして，会話文の音読の仕方を中心に考える。
		7	・各自が好きな場面を選び，音読のめあてを設定して「かさこじぞうしょうかいカード」を作る。
		8	・「かさこじぞうしょうかいカード」に沿って，１～５の好きな場面の音読をグループで行う。
3	お気に入りの昔話を一冊決め，音読してみたい好きな場面と，音読のめあてを設定し，音読発表の練習をする。	9〜12	・様々なジャンルの昔話を読み，「お気に入りの一冊」決める。 ・お気に入りの一冊が見つかった児童から音読して友だちに伝えたい場面を考え，「しょうかいカード」を書く中で音読のめあてを設定する。 ・同じジャンル内でペアを組み，音読発表の練習する。
4	自分の選んだ昔話の好きな場面を音読して発表する。	⑬14	・選んだ本の違うジャンルどうしでグループを組んで，自分の選んだ本の好きな場面を音読発表する。（２時間目はグループの構成を変えて行う）
		15	・単元をふりかえる。

4　本時の学習

(1) ねらい　自分の「お気に入りの一冊」の好きな場面について，場面の様子や登場人物の気持ちを考えて音読することができる。

(2) 展　開

学習場面と子どもの取り組み	教師の働きかけと願い
1　本時のめあてを確認する。	・前時までに練習してきたことを発表する場であることを告げて，友だちにお気に入りの本について伝えていくという意識が高まるように言葉をかける。
お気に入り昔話の「音読はっぴょう会」をしよう　その１	
2　グループに分かれて以下のように音読発表を行い，互いのよい点について感想を言い合う。	・「お手紙」の学習でグループで読み合った経験を掘り起こす言葉をかけ，活動に見通しがもてるようにする。 ・発表の間は各グループの取り組みを見守る。よい点は積極的に認め，自信をもって発表できるようにする。
・自分のめあてを明確にもって音読できている児童　→	・児童の取り組みを具体的に認める言葉がけをする。
・つまったり，間違えたりしてうまく音読できない児童　→	・そばに寄り添って一緒に聞き，どうしても読めない場合は一緒に読み，発表後はよかった点を認める。
・感想がなかなか言えない児童　→	・どうしても感想を言えない児童には，本時をふりかえるときに書くように助言する。
・早く終わったグループ　→	・残り時間を告げ，時間内でもう一度する，他にも感想を言い合うなどグループで考えるように助言する。
3　発表の中で特によかったと思う友だちの発表を全体で聞く。	・特にどのよかった人はいたか，と投げかけて，児童自身が感じた仲間のよさを共有できるようにしたい。なお，児童から出ない場合には教師から取り組みのよかった児童を紹介する。 ・この活動を通して，次時において再度メンバーを変えて発表する際のお手本となるようにする。
4　本時をふりかえる。 ・ワークシートに書き，時間があれば発表する。	・次時の発表へのめあてとなるような言葉を紹介し，全体に広めていくことで次時への意欲が高まるようにしたい。

■　分科会の整理と総括　■

1．本校園の国語科教育における一貫教育への取り組みについて

○全体的な構想・・・湯浅

2，各校園における現状

○幼稚園・・・藤田

○小学校・・・藤原

○中学校・・・川井

3．公開授業について

○授業者自評・・・喜多川

・本単元の前半「かさこじぞう」の学習と同じスタイルで，自分が選んだ昔話を音読する学習を行ったこともあり，子どもたちは本時でも見通しをもって学習に取り組むことができた。

・最後の音読で暗唱をした子がいたが，最初はたどたどしかった読みも練習の中で自信をつけて大勢の人の前でも臆することなく音読ができた。

・本時は音読をグループの友だちと発表しあう時間であったが，一つの教室内でたくさんのグループが同時に発表しあったので，発表者の声が聞きづらい環境をつくってしまった。

○質疑応答，意見交換

・聞くときにメモを取る。これはどのように育てたのか。

→　取り立てて指導はしていないが、子どもたちがメモを取る姿に任せた。

・中学生でもメモをとれる姿は見られない。小学２年生でもそこまでできるのだ。

・メモを取っているので目を見て聞いていない。寂しい感じがする。また，たくさんの声が交錯する中での発表では，せっかくの音読が聞こえなくなったしまって残念であった。

・ある子が，こわい話を選んでいるはずなのに「この場面を選んだのは幸せだったから」といった。このような児童の思いが取り上げられるような場があって欲しかった。

・なぜ、２人組なのか。６人もいた場合，聴いたものについて「どう評価するのか」という点で難しさが出てくるのではないか。

→生活班であること、発表の時にある程度聞き手がいたほうがよいことと１時間の授業で互いに発表しあうのに時間的にちょうどいいという点から６人。

・低学年なら徹底してペアで対話させるのも効果的ではないか。

・一貫教育にしろ何にしろ，その授業が目標を達成したものであるかどうかを踏み外してはならないのではないか。その点から，本時の授業は目標が達成されていたかどうかは疑問である。

４．共同研究者より

○間瀬先生

・様々な形の読書活動・・・アニマシオンについて

・声に出して読むこと・・・最近のブーム「声に出して読みたい日本語」

・暗唱をすること・・・からだの中に染み入っていく

・低学年のグループ活動だったが，自分たちで学習を進めていくにあたって，司会用のマニュアルが活動を支えていた。

○足立先生

・昔話をどこで知ったかという調査（１０年前のもの)・・・学校で知ったのはわずか２．１％つまり，ほとんどの子が昔話は学校以外の家庭などで知っている。

・昔話の内容がもつ「勧善懲悪」など，昔は小さい時に家族などから聞いたときに「怖い」と感じたことが，その後の自分の行動の抑制につながっていた。しかし，現代では昔話を知る機会が昔より減っており，子どもたちが様々な心の問題を抱える今の時代こそ昔話を触れさせてもよいのではないか。